

障害者が用いる代表的な意思疎通手段

資料 1

意思疎通手段	主な使用者	内容	歴史	資料
点字	視覚障害者・ 盲ろう者	<ul style="list-style-type: none"> ・縦 3 点、横 2 列の六つの凸点の組み合わせで構成。 ・視覚障害者の 12.7%が使用(H18 身体障害児・者実態調査)。 ・かな、数字、符号類等によって構成されるかな文字体系であるため、意味の理解を容易にするため、言葉を空白のマスで区切る「分かち書き」を用いる(例:につぼん□てんじ□としゃかん)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・19 世紀初めにフランスで考案され、1854 年、ルイ・ブライユ考案の6点式点字が、フランスで公式の文字として採用。 ・19 世紀後半、東京盲啞学校教員の石川倉次がブライユ点字の日本語版を考案。1890 年 11 月 1 日の点字選定会にて採用(11 月 1 日は点字制定記念日)。 	別紙1 (1~2頁)
手話	聴覚障害者 (主にろうあ者)	<ul style="list-style-type: none"> ・手指の動きや表情等を使って、概念や意思を視覚的に表現する目で見える言語で、音声言語(日本語)と異なる言語体系を有する。 ・65 歳未満の聴覚障害者で 25.0%が使用(H28 生活のしづらさなどに関する調査)。 ・全日本ろうあ連盟は、手話言語の権利を、「手話言語を獲得する」、「手話言語で学ぶ」、「手話言語を学ぶ」、「手話言語を使う」、「手話言語を守る」という5つの類型に分類している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・16 世紀、スペイン人ポンセ・デ・レオンが、聴覚障害者のための正式な手話を考案。18 世紀後半、フランス人の神父ド・レペがろう学校を開き、手話を使った教育を開始。 ・日本では、1878 年に古川太四郎が京都盲啞院を開設し、ろう教育に用いられた。 ・本県では、手話が禁止された歴史がある。 	別紙2 (3頁) 別紙3 (5~6頁) 別紙4 (7~8頁)
要約筆記	聴覚障害者 (主に中途失聴・難聴者)	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手の話の内容をつかみ、それを文字にして伝える。 ・65 歳未満の聴覚障害者で 22.9%が使用(H28 生活のしづらさなどに関する調査)。 ・手書きとパソコンで行う方法があり、早く書くために、全国標準略号・略語を用いる。 ・利用者の横で紙に書く、または、パソコンに入力するノートテイクと、OHC や OHP を使う全体投影による方法がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・要約筆記の試みは、1960 年代後半から始まり、全国的な普及は1973年に京都で開催された「全国難聴者組織推進単位地区研究協議会」の発足の場で行われたのがきっかけ。参加者が全国に持ち帰り、普及が進んだ。 ・1982年「全国標準略号・略語」が提案された。 	別紙2 (3頁) 別紙5 (9~10頁)
指点字	盲ろう者	<ul style="list-style-type: none"> ・両手の人差し指、中指、薬指の6本の指を差し出し、これを点字タイプライターのキーに見立てて点字記号を打つ方法。 ・盲ろう者で指点字が受信可能な方は 1.7%(H24 盲ろう者に関する実態調査)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・福島智氏(東大教授)が全盲ろうとなって間もない1981年3月頃、母親の福島令子氏が考案。 	別紙6 別紙7 (11~13頁)
指文字 (解読指文字)	盲ろう者	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の手のひらに指文字を綴って会話する方法。 ・盲ろう者で解読指文字が受信可能な方は 3.8%(H24 盲ろう者に関する実態調査)。 ・日本の手話で使われている指文字をそのまま使う方法と、アメリカ手話のアルファベットをローマ字式に綴る方法がある。 ・なお、弱視または視覚が活用できる場合は、受信者の眼前で空中に呈示し、必要に応じ、触覚と視覚の両方を使って読み取る場合がある(弱視指文字)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中世ヨーロッパの修道院で、沈黙の行の際、修道士たちがコミュニケーションを図ったことが起源。 ・16 世紀、スペイン人ポンセ・デ・レオンが指文字で教育を行う。その後、フランス、アメリカへ伝わる。 ・1929 年、アメリカ視察から帰った大阪市立聾学校の大曾根源助が、かな 45 文字を表す指文字を考案。 	別紙6 (11~12頁)

意思疎通手段	主な使用者	内容	歴史	資料
触手話 (解読手話)	盲ろう者	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手が手話を表し、盲ろう者がその手に触れて伝える方法。 ・盲ろう者で触手話が受信可能な方は 6.7%^(H24 盲ろう者に関する実態調査)。 ・なお、弱視の盲ろう児・者の場合は、受信者の眼前で手話をし、視野が狭い人の場合は、動きの狭い手話を行う方法もある(弱視手話)。 	<p>(手話に関し、手話の歴史欄参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍において、大幅な制約を受けた。 	<p>別紙6 (11~12頁)</p> <p>別紙8 (14頁)</p>
マカトン	知的障害者、 ダウン症、発語障害で発音がはっきりしない人、 自閉症者、麻痺などの運動障害のある人等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の 40 か国以上で使われている言語指導法。 ・知的障害児が通う特別支援学校や家庭等で利用。 ・「核語彙」と呼ばれる 330 の言葉から、個人の発達やニーズに合わせて語彙を選び、生活の中で繰り返し使う。 ・マカトンには、サイン(身振り)とシンボル(線画)がある。 ・マカトンサインは、手指による動作表現であり(例:「バイバイ」=手を振る)、多くが手話をベースにしている。 ・マカトンシンボルは、絵文字のような線画。言葉やサインをうまく表出できない人も、シンボルカードを指さしたり、シンボルを相手に渡したりすることで、表出の手段となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1972 年、イギリスの言語聴覚士マーガレット・ウォーカーが病院に收容されている重度の知的障害と聴覚障害者を併せ持つ方を対象にサインの導入を試行。 ・その後、指導する語彙を日常生活でよく使う 350 語を「核語彙」に選定し、マカトン法の基礎が確立。 ・1983 年、松田祥子氏がイギリスの養護学校でマカトン法と出会い、1986 年から、旭出学園教育研究所にて日本版マカトン法の作成作業に着手。1989 年、330 の「核語彙」を選定し、「日本版マカトンサイン集」を出版。 	<p>別紙9 (15頁)</p> <p>別紙10 (17~18頁)</p>
PECS (パクス:絵カード交換式コミュニケーションシステム)	自閉症者、 ダウン症、失語症者、聴覚障害者等	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が絵カードを用いて、自らコミュニケーションをとれるようにするもの。 ・家庭や職場等で自らの意思を文章にして伝える必要がある場面等で活用される。 ・6つのフェイズ(段階)から成り立っており、対象者が一枚の絵カードを相手に渡すところから始まり、順に学んでいく。 ・絵カードは本人の障害の度合いに合わせて作成(イラストだけ、写真だけ、イラストに文字を添えて等)。本人の生活に必要なカードを徐々に増やしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1985 年にアンディ・ボンディとロリ・フロストによってアメリカで考案され、自閉症の未就学児に実践されたことが始まり。 ・日本では、ピラミッド教育コンサルトオブジャパンが指導・普及にあたっている。 ・飲食店では、PECS を活用したメニュー端末が導入されている店舗がある。 	<p>別紙11 (19頁)</p>
重度障害者用 意思伝達装置 (伝の心)	重度の肢体 不自由がある人等	<ul style="list-style-type: none"> ・センサーを使用し、指先や眼球のわずかな動きで、文字を装置に入力して、自分の気持ちを言葉にできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(株)日立ケーイーシステムズが開発(1992 年開発開始、1997 年 12 月製品化)。 ・2006 年 10 月から障害者自立支援法に基づいた「補装具」の対象品目「意思伝達装置」として給付。 	<p>別紙12 (20頁)</p>

意思疎通支援	主な使用者	内容	歴史	資料
TEACCH (ティーチ、自閉症と自閉症に関連したコミュニケーションにハンディキャップのある子どもたちの治療と教育)	自閉症者	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカのノースカロライナ大学を基盤に実践されている、自閉症者とその家族、関係者(教師やグループホーム等の支援者等)を対象にする包括的なプログラム。 ・知的障害者支援施設で、物事の手順やこれからの予定を伝える場面等で活用されている。TEACCH の考え方をベースに環境を整備したうえで、マカトンや PECS 等による意思疎通が行われる例がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1972 年、アメリカのノースカロライナ州で開始。 ・日本への導入は約40年前。 	別紙 13 (21～22 頁)

【参考文献】

点字:日本点字図書館 HP、永嶋まつ子『石川倉次物語-日本点字の創始者-』有限会社文明舎 2009 年、厚生労働省「平成 18 年身体障害児・者実態調査結果」平成 20 年 3 月 24 日

手話:NHK 福祉情報サイトハートネット HP(手話と口話-ろう教育 130 年の模索-)、ナショナルジオグラフィック日本版サイト HP(手話はこうして誕生した その歴史)、障害保健福祉研究情報システム HP(我が国における聴覚障害者の言語教育の歴史・小畑修一)

要約筆記:「要約筆記者養成テキスト」作成委員会編集・発行『要約筆記者養成テキスト第 2 版』2018 年

指点字・指文字・触手話共通:千明弘美・広瀬信雄『盲ろう者のコミュニケーション方法に関する研究(1)-障害の分類とコミュニケーション方法』、小野佐保子・仙宅元記・広瀬信雄『盲ろう児教育の歴史と現代-その開始と現代的サービスの支援機器』、厚生労働省平成 24 年度障害者総合福祉推進事業「盲ろう者に関する実態調査報告書」平成 25 年 3 月～日本のヘレン・ケラーを支援する会～社会福祉法人全国盲ろう者協会

指点字:認定 NPO 法人東京盲ろう者友の会編著・福島智監修『指点字ガイドブック』改訂新版 読書工房 2012年

指文字:手話教室・特別講座「指文字塾」HP

触手話:東京盲ろう者友の会 HP

マカトン:日本マカトン協会 HP

PECS:ピラミッド教育コンサルトオブジャパン(株)HP

重度障害者用意思伝達装置:保健所における難病保健マニュアル【滋賀版】の見直し検討会・難病コミュニケーション支援ワーキング部会『難病コミュニケーション支援について』令和2年3月発行、小澤邦昭『脳血液量の変化を利用した意思伝達装置』

TEACCH:川崎医療福祉大学 研究代表 大田晋『自閉症等発達障害児・者を支援する施設・事業所における TEACCH プログラム導入方策の調査・研究～施設・事業所、教育・研究機関、行政等の連携のあり方を含めて～』、LITALICO 発達ナビ HP(TEACCH とは? ASD(自閉症スペクトラム障害)の人々を生涯支援するプログラムの概要を紹介、鳥取大学井上雅彦教授監修)

【インタビュー】

点字:滋賀県立盲学校(佐谷校長)、滋賀県視覚障害者福祉協会(大橋会長)

マカトン:奈良大学社会学部礒部美也子教授

PECS:NPO 法人滋賀自閉症研究会たんぼぼ(大橋副理事長)

重度障害者用意思伝達装置:NPO 法人オリーブの実(角野理事長、大林様)

TEACCH:TEACCH プログラム研究会滋賀支部(鎌田理事)